剪花翁傳前編

秋

七月
八月
九月

共五

ヲ9
3875
4

門 ヲ9
3875
巻 4

早稲田大學圖書館
昭26.6.8 雙
藏書

草花谷羽傳前篇巻之四

小野寺圖書

七月開花之部

元日立春之例

○木芙蓉

花一重又八重ゆり色淡紅ゆ葩縁ゆ中紅の暈をうけゝり形ち牡丹の葩ゝ軟ゆ薄〻〻〻五瓣〻或ハ黄金艸或ハ木綿又ハ木槿ふがに似く稍大き〻〻開花五数乃頃ゝり九月迄咲是と秋牡丹といゝり花莖毛ゆ出く房と成

一三輪づゝ日〻咲〻 方日向 地三分湿 土肥撰くと 下種春ひゞゝ〻〻

分株 春株ゝり出ゝ芽と其年ゆ十月ゆ分植べし 木葉くも腐ゆ成く皮も

力弱〻〻 水ゝり至〻〻〻〻〻〻て早朝の巳午の刻巳後ゝり控ゝみ

出口文庫

金石

夕方迄ハ漸〻に蕾ふくらみ翌の下刻頃より落ル蕾〻曙ハ既に
半開ハ〻〻即ち是倍〻是より旭升〻頃ハ至り満開〻て己の刻頃
より萎凋そうろう〻依〻此落ハ夜中ハ物ゆへ大うろうろ〻〻
此落て未明ハ剪淋て壺て未迄絞り花て掩ひ色を布とろ〻下の方
より巻色ミて釜の蓋ハ穴て明釜ハ酢て入石灰て水〻加く是ハ
焚沸て花莖の本て穴ハ扞へ湯火の気ハ觸ざる為に者〻べ〻
後塗水ハ扞へ升水〻て用ふべ〻是のごと〻も水の升るとのハ
十に二三ハ過て且此花暁〻より早朝ハ開て午時迄保ちごと〻近頃懐考
へ〻頗る一方て得〻り志うのミ〻に朝ハまれ夕ハ甚其好そろ

時ハ開〻せるのうぐいすの花枝てのてせられば筆墨ハて述〻〻

○刈萱　燕麥　穂七月初　方日向　地二分湿　土〻〻〻　肥淡ハ〻〻

移分株ともに春彼岸より〻〻

○芭蕉　花黄色　開花秋後より葩開〻て百ハ一枝宛凡百日の間ハ
咲〻英の長さ二尺又ハ三尺ばかり伸〻て　方半陰　地三分湿　土回埜　肥大
便寒中ハ入〻〻株ハ生ずる芽て春彼岸より三月中旬迄ハ鉄分植べ〻

○和唐紫菀　花紅藤色　開花七月上旬て房ハ形ハ毛毬のごと〻ハ
英ハ〻〻ど中器〻〻ハ育方ハ〻も同〻〻

○唐綿の花　名義未考　色濃紅ハ〻ハ白頂花の如く英攢て房て色り

開花七月上旬〳〵育方隨意〳〵後莢となる内小必き種ありてパヤ充り
此種天保癸卯の年頃舶來は今諸方小弘まり　升上切改て焼べし

○鳳凰檜扇艸　花亜種のごし　開花七月中旬より八月下旬迄あり
育方亜種ありて〳〵葉の形ち孔雀檜扇ありも亦見挾小繁密〳〵

○銀杏鷄頭花　花赤又黄又赤黄雜あり又同種小莖のひくく短きあり
長五寸ばかり一尺餘あり全躰よく縮まりて美あり是て矮鷄ばかり又朝鮮
ともいへり　開花七月中旬より八月中頃まで盛に育方　花鷄冠花小同〳〵

○秋藤瞿麥　花白あり又淡赤小淡鼠色の氣あり此花　開花七月
中旬より漸〳〵赤〳〵鼠色の気尚あり　方三分厚　地二分濕　土砂交

肥油粕又淡小便　下種春彼岸此年僅小五六寸ばかりあるべく翌年五月
末より莖枝出て形ち春の藤瞿麥小似られど尚大形く葉も太く葉も殊小
厚く秋小至て咲く莢三四十攢て一房てあり此時莫花ハ切あり二番芽出て
九月小花ありされど莖枝短く莢也さく少して勢い劣もあり一番種
とよく熟さて莢のまゝ収く翌春蒔の花枝も勢ひ又盆中に取蒔
して十月温室小入翌春暖気て漸く承出て漸く成長して七月上至
花咲て莖單〳〵て枝なく勢い劣もあり一番二番共小霜覆はして置ハ大
寒頃迄花保つあり此種豆列の山中に産す〳〵は天保壬寅春是て得あり

○和紫菀　花一重色紅藤　開花七月中旬〳〵花枝ともに去まるべ

唐綿
木芙蓉

播州猫柳

中品なり　育方向もみふじ

○天神花　花千重　色黄赤　開花七月中旬より八月盛なり　方日向

地一分湿　土えんてん　肥淡小便　芽出後二三枝花さく　三枝さくぶぐ

下種春彼岸より

○木槿　花八重　色藍是ちく淡藍小鼠色かるく成いり　開花七

月中旬より　升水の方へ既小上ふいり

○百日紅　花紅色小英群て房なるなり　開花七月中旬より八月中迄なり

元是生の樹故小育方ハ随高なり　幹枝ハ拓榴小似て皮理濃く堅く

○梅ふぶ　実赤なり白なり熟する時節ハ七月中旬より　挿花小

用ふ　方日向　地乾　土えんてん　肥大便寒中ふ入べく　接春彼岸寄

接ふり　移同節に　是赤山生の物故小水氣ハいとふぶく

○七月梅　花一重　色白　開花七月中旬より咲く葉ハ夏土用中より

漸く散て開花より節も少く残り段く小落なる素なり木の性痩

る方ふるなるの故小花も間粗小付く　育方清梅も小同く

○女郎花　花黄　同種ふく　開花七月中旬ふさなるの一種

なり　升水を切て煙べく

○鹿の子百合　花淡赤く濃赤の點班入あり　開花七月下旬花中形く

○葉鶏頭　雁來紅　あき仲　黄色葉あり猩く葉なり十分の色ハ

七月下旬より用ゆ　方日向　地中乾　土壆交　肥淡小便　下種春彼岸ハ
剪時を夕方の露ふきうけて切即時に行て副根元より葉を
ちぎりとりあげて結ゆ是ハ壆ゆ動揺せぬゆえの料なり
升水ハ土酢をそそぐ　如酢下品なれば利うすくして木
灰汁をもて煮へ〳〵ようほどなり水器小ゆえ〳〵入水上り
後切口ふた又剪へ〳〵さきぶり切ちざるハ弥〳〵或ハ切口を割
てもよし〳〵世間冷気ふるきゆえ水をあたゝめうゝ上るなり
又方　藁灰をもて煮へ〳〵　又方　硫黄をもて煮もよ
又方　梨叶　唐鹿尾藻をもて煮へ〳〵冷水ふかく扞入ゆべし

○播州猫柳　絮蕊既成を七月下旬之蔓平ふ薄く海布乃壆ゆ
如〳〵倍小是をひきぬきうふ葉の間至〳〵結まり故小花繁〳〵
常の猫柳ハ繁密ゆ〳〵と　方日向　地一分湿之是をもて平壆多く蔓
ゆ〳〵　土肥を随意ゆべし〳〵　擺春彼岸より〳〵

○水引草　羨塵　花赤白二種　開花七月下旬之　方半陰　地半湿
土壆土又ボコ土小砂交　肥淡小便　分株下種ともに春彼岸より〳〵
分株ハ成長を待〳〵下種をもて〳〵白色ゆえふ至〳〵清雅なり壆も青
緑色にて賞ちべ赤色二種あり壆ゆ赤きハ花色殊ふ赤く英目挾ふ付て
勢ひ〳〵泛ゆえ壆の黒をもて鈍ゆえの英の裏向く数少くして劣まり

八月開花之部

○薄　芽ハ春彼岸後より生ず穂八月上旬ニ出る穂葉共ニ用ゆ〳〵郊野ニ生ずる物多りよて貢方ハ〳〵

○糸薄　葉至て細く斑あり穂八月上旬なり穂葉ともに用ゆ性質薄ニ同〳〵一方ニ升水ハ朝夕より間ニ煎服　和木艸　唐鹿尾藻

右二味を切ニ小切てよく焼冷水ニ小切置其後用ゆ〳〵又右二味をよく煮るもよし〳〵ごまも冷水ニ扞みべし〳〵

○萩　○糸萩　花赤色形ち〳〵枝垂る　○白萩　○宮城野

花ハ色赤く形ち〳〵○矢筈　又ハ〳〵ごもの又雀ときもの色固高さ四尺計ニ成ル　開花八月上旬ニ方地土樹ニ成ル　肥大便寒中ニ小ゆ〳〵移分株冬より春彼岸迄〳〵　升水ニ成ケて煮ゆ〳〵又上酢ニて煮ハ愈〳〵　又方本ニて沸湯ニ扞入好湯ニ成ル沸湯ニ佐賀扞入好是三度も沸湯ニ登て後冷水ニ漬ゆ〳〵水上る時用ゆ〳〵　又方薄き莚ニ覆ひ好より沸湯ニ浸き〳〵て冷水ニ漬ゆて後扞べし〳〵

○茶の花　花ハ色白く形山茶花の至て小さきの小似り開花八月上旬ニ方日向地二分湿土ニ成ル　肥大便寒中ニ入べし〳〵

下種ハ秋彼岸ふぬ〻く春彼岸取出して畝ふ植へ〻〻芽生ひ
易〻〻　移秋彼岸後う九月ゟ〻〻長大ふ成ゟ活生う〻〻
挿花う〻〻て〻〻ふ〻〻雅ゟり

○八朔梅　花八重色紅　開花八月上旬ゟ是の如く〻〻咲ゟ〻〻
立秋ゟ頃ふ葉て殘らず撮て勢気とゞまる故ゟ〻〻ゟ嫩も
花と共ふ出う〻〻自然ふ落葉ゟるゟの八十月乃末ゟり花開〻
咲〻〻来二月の頃満開ゟるゟり

○早水仙　開花八月上旬ゟ元是早咲ふ付〻〻早作ゟ〻〻
時ふ〻〻ゟる成賞翫ゟるハ美を貪ゟゟ今是を聊辨じて是卑

業ふ〻〻ゟ成知〻ゟ美貪心を破ら〻〻むゟゟて大底四月中旬頃水
仙葉長て形ち崩也例ゟ〻〻姿失ふて剪花者通じて是を巣ふ
入ゟゟ〻〻り此時根を堀出して根玉の長き或ハ小玉ふゟハゟ〻〻
去〻〻大玉ふ真圓ゟゟ取三日許ゟ〻〻干〻〻乾う〻〻小便中ゟ
浸〻〻直ちふ取上終日干乾ゟゟ〻〻是ふ〻〻ゟる夜五日ゟう日て
重干て陽地て深さ五六寸廣げ〻〻床ゟふ〻〻那智黒石或ハ淡
州黒の小石ふゟ〻〻ても一連小並べ布其上ふ玉三寸許置ゟり
件の大丸玉て植並べ一ケ月ゟかりて經て鼓質ゟて日覆ゟゟゟ高さ
三尺計昼夜共小置く〻〻隅日ふ度つ〻真冷水て洗〻〻べ〻〻若連日洗

水せんとふゝが吐水通とよく〳〵水溜佛ゑらし要〳〵是の如く
冷水て洗くること幾日といふとハ定めがたく〳〵其芽繕けて考へ〳〵洗く
ゝゝさてようの時て考て皮簀て取拂ふ〳〵ふまれ〳〵是も時気な
より取拂ふ〳〵其ま〳〵置ゝもけり言語とかて解ゝ〳〵〳〵〳〵
覆て取拂ふて炎天ふ當ゝて頭〳〵芽成長〳〵花を結ぶ細ふ
根玉て干時て六月の中節に擬〳〵小便ふ浸〳〵五日干付て極暑
擬〳〵日覆〳〵て冷水て灌くて寒気ふ擬て皮簀て拂ふて日り
當〳〵ゝゝて陽気地中に徹〳〵て花を催ゝなり

○山茶花　普　花一重色白　開花八月中旬　方地土肥移接

櫻共ふ椿ふ同〳〵　已下の山茶花同方並に同〳〵

○紺紫苑　花ゝ色濃青〳〵　開花八月中旬より九月迄咲く花枝
ゝもにゝゝゝ中ゝゝ　同方同〳〵

○白露　椿　大論花一重　色清白　開花八月中旬之此花椿の類〳〵ゝゝ

○初嵐　椿　花一重　色太白　蕾玉〳〵〳〵故小白玉と稱て葉大く
大く　開花八月中旬之又同種ふ嵯峨と稱ゝるゝのゝ苔尖て葉も
葉も緑色深〳〵両種共ふ温室ふ入る時て花葉凋て落ゝ〳〵〳〵
初嵐ゝゝ〳〵清雅なるゝのあり

○秋の山　椿　花一重　紅白飛絞あり　開花八月中旬之

○せいい大輪　椿　花千重　色三種あり　紅又濃紅小白飛絞班　又太白小濃紅絞の班あり　開花八月中旬に形ち葉なく枝子椿小近く小葩段〻肉小群攢て葩の間小細ふる葉隅〻より出るようて甚大輪〻ふる赤花の葉小班あり入〻て勇花者略通〻て大輪〻ふりて呼ぶり　又大て濁もり又花のこと班の入〻てとろひとのこと呼て大輪て省略〻て〻ぶて花葉〻もに班の入〻てとろい大輪と称ちりさて班の葉の花に赤地に白花班入てよ〻〻〻奥班葉ち花に白地小赤飛班て佳とそぶも殊小艶美〻此花甲年以後の新生にさてせ〻の字いまぶ考〻此頃池田栽樹家綿半ちへる者の曰成飛の字の上されと字義小知〻ちり

○たけふみ　椿　八朔椿　花一重　色淡紅地小濃紅の大小長短の縦班小點班等繁密小入之　開花八月中旬中輪大葉に予が園中小此枝の変生せ物數株あり扨たけふみの名あ茅心西ちぶ或人倩此班文成見〻是ち滝波の芽ありべ〻といへり此説いと面白〻〻

○貴船菊　花淡紅色　開花八月中旬より九月中旬まで咲　方三分陰地三分湿　土肥土砂交り　肥淡小便冬に二度又芽出〻前小四五度ちくぐ〻分株春彼岸より〻〻成長ともち三尺ばかりになる升水かく〻よて切はと爛ら〻酢ちて煮べ〻

○睡蓮　花一重　色白く蘂黄なり　開花八月中旬形鉄泉花

初嵐椿
水仙早作の躰

八朔梅
たけふと椿
黄金艸

風車ふとふ好くり水中に生ぜ葉莖ともに蓴菜ゆも又似くり

○唐壺吾右　花黄色　開花八月中旬　方三分陰　地二分湿　土回壡

肥干鰯春秋両度芽を催を時ふへべ〜　移三月末〜葉ふ鼈甲班

入ものなり　升水八葉ふ絞り火湯ゆ気を防ぎて酢煮ちべ〜

又方　根本より葉際迄竪ふ小刀目を入水中へ沈めあれ夏後挿べ

又方　和木艸　唐鹿尾藻　各二味をもて切り代ちく煮べ〜其後

冷水ふ杆置ち〜水土〜用ふべ〜

○黄金艸　俗ふ蓮華ちふ　花ゆ色黄ぐ〜茶　當蓮大山蓮ちく

開けぐ木綿の花ふ似くり　開花八月中旬　方半陰　地二分湿　土ちく

肥淡少便寒中三度花まゆ二三度ちくべ〜　下種春彼

岸ち〜葉好形ち土圭艸ゆ似く尚大きく至く細長く伸ちく

水升ぐちく時々切ぢて必ず逆水〜水墨ふ杆ちべ〜

○冬牡丹　勇花者所謂寒牡丹即是ぐ　花の色紅白二種あり

開花早ち八月ち咲初て月く咲續きて寒中迄も花ちり　方日向

西北の塞ぐる所ち〜旦風透ちちべ〜　地花壇三分湿　土回壡

肥淡大便寒中ふ入べ〜　接春彼岸ち〜花ゆ時雨覆ひちべ〜

夏月炎天ふ葭簀ちて日覆ちべ〜　立秋の日ふ葉ちて刈べ

刈捨く直ち油粕ちへちべ〜　移ち此葉刈ちて即時ふちべ〜

又春彼岸もよりゝ春より八十八夜頃開花之さて春牡丹の上花と称
するものと同ゝ〳〵蕾辰の刻より漸〳〵開く花形約ふ正〳〵まり
刻須葩収りて葉と掩ひ色む翠も亦開くこと昨日のごゝ〳〵是乃
如くあること四五日少ゆくり是と上品にさて九月の末西風吹き又霜
降時ふ及んでハ花半開き〳〵まに〳〵満開其竟ふ萎凋むこ故ふ
西風初〳〵吹頃より花壇の三方と樹ふ上と藁莚の敷こて覆ひ囲ひ
南方ふ油障子を入〳〵陽氣と取時ハ花周まゝて寒中にも花盛
あり故ふ寒牡丹と称とれど賞ハ春妹二季咲の秋より漸〳〵後
〳〵冬に至るものゝ茲ふあり〳〵剪花者八九月ふ咲出るものと寒

牡丹の早咲と樹称して賞花市に鬻くなると世俗是代求て專ら
珍賞ものと霜月より寒中ふいたゝく咲ものハ甚少く却て賞
ひらさて挿花ふ剪ふ秋の花莖ハ伸ひ故ふ古枝と長くかなて切も
水を吸ひ〳〵升るものゝ若上ざる時ハ春牡丹の古枝の升水り
方と同〳〵さて春寒の両種ともに池田ふ奥谷村より影〳〵出る物
悉く接木ゝ故ふ砧根より出る芽ハ勢ひたゝくて成長〳〵易く
漸〳〵盛ふふくふ隨ひ接穂ハ枝と伸後ものく竟ふ枯敗するものゝ
株となる即ち是剪花者ふ所謂正本たるものゝ又寒牡丹の白花ふ

正木は至て希なる谷村より出るを白花の寒牡丹も正木は更に稀なるべく
皆接木なり此接木の穂を取親木も亦接木なる愚が園中に白寒牡丹の正
木あるにその十株計あり甚育ちて長一尺ばかりなるは三四株なり
此正木と云は即ち取木なり此取木の業を別に記すべし

○葦　穂八月中旬に養育の方に及て自然のまゝ挿花に用べし
一方に朝夕の間に切取和木州唐鹿尾藻二味を以て焼冷水にて入
れ後封ゝ　又方右二味にてよく煮もよゝ冷水に漬置べ

○川竹　穂八月中旬に穂も葉にして大きく莖の圍り二寸計
なり初め小竹の筍に如く芽三月より生じ五月末専ら盛なり
又株元より上の方六分目に至まて毎節に枝を生ゝ青くして冬枯
ずして川竹と呼なるべし　挿木にも頗る雅趣にもとゞ水上なる
是を食塩の苦水に枝葉を強く浸して用べし

○仙蓼　花蘂竹茶色　開花八月中旬より十月上旬まてなり　方
日向　地二分湿　土肥　分株春彼岸より　形ちそなり
木ゝ高さ三尺にも成ふるり

○秋透百合　花並百合と同じ　開花八月下旬より十月中なり

○茴香　花黄色形ち至て小房女郎花に似なり　開花八月下旬
方日向　地下　土山土　肥小便　下種春彼岸より　株十月頃より

分ゞ〳〵よく育まゝ高さ六尺〳〵もみうゝ剪得〳〵もゝ中凋むふり
升水の方ゝ蔕うて枝葉とまぢりよせ切口と少〳〵切捨冷水と逆
水〳〵て水器ゝ杆〳〵皆〳〵て水上うゝ

○蕣金蕉　花白形蓑荷の花ゝゆくるゝの罧ゝ出く〳〵段〳〵高く伸
咲ふり　開花八月下旬ゝり九月ゝ咲ゝ　方日向　地二分湿　土回埜
肥淡大便寒中　花前ゝ淡ゝ便と淡ゞ　分株春彼岸は　移三四
月中ゝ花後ゝり三月迄霜覆ひとゞ〳〵　盆ゝ栽る時ゝ油糟と入〳〵
九月ゝり三月迄地窖ゝ入ゞ〳〵　世俗ゝ所謂蕣金粉ハ即此根ゝ

○美人蕉　紅蕉　花黒紅色形ゝ蘭蕉ゝ似ゝり　開花八月下旬

ゝり九月ゝ方地　盆栽物　土回埜　肥油糟寒中　又花前ゝ入ゝ方時ゝ
具合〳〵〳〵　分株　移春彼岸は花後ゝり三月迄地窖ゝ入ゝ

○兩面椿　花八重色濃紅　開花八月下旬ゝり蕾半開き〳〵て尚開く
べき〳〵ゝゝ〳〵四五日ゝ咲ゝ〳〵開ゞ偶早く開くもの十ゝ三ゝて半開の
仮病むもの八九ゝ挿花ゝても半開のまゝ多ゝゝり又開くもゝり定〳〵
かゝと又温室ゝ入ても開ゞて凋ゝ落ゝ此蕾ゝ初嵐ゝ温室利ゝと

○水款冬　又鬼蓮ともゝ　花の色紫ゝ淡紅ゝ帯ゝり　開花八月
下旬花萱艸ゝ似て蓮のごゝ臺ゝり臺莖葉ともゝ芒刺あり　下種春
彼岸水底ゝ植〳〵　分株古根ハ同時ゝ新芽ハ三寸伸く分〳〵

○秋菊　花色種〻形ち大中小品數悉〻牧拳とゞまるべし　開花八月末より咲　育方夏菊と同し　分株　莖元より早くかぶる芽を鈍苗代にして冬〻の内より春ふかけて扞〻正月早〻ちゝめてべし　扞畢〻〻根を生じて春畝に移すべし　菊吸蟲を日の出の頃ちゝめて取捨へしかるべし花をとゝのゝれ又根蟲をも土をよく穿ちて取捨〻〻夏秋寒〻の菊ともに　升水を切口より燒て〻〻

九月開花之部

○秋擬寶珠艸　花紫色兼之くして長し　開花九月上旬〻

方三分陰　地土摂〻〻肥淡小便芽出し前三度花節小四五枝殘くべし

○妙蓮寺椿　花一重色淡紅　開花九月上旬英之さ是亦一奇種〻

○白青蘭　花一重　開花九月上旬より十月迄あり　方半陰　地三分湿土砂交壅土　肥油粕又干鰯あり　冬〻〻　分株春彼岸

○笹龍膽　花濃青又白形ち朝皂の蓉乃ごとくにして中開〻白花て上品〻〻開花九月上旬より十月迄あり　方二分陰　地三分湿　土回壅　肥干鰯淡小便　分株　移〻も春芽出しの時より　水をよく〻上〻〻時ハ切口と又切捨わり荒の類にてよく色を水よりにて後水器小入やべし

○秋神遊菊　色白く英大輪〻　開花九月上旬花艶〻咲

○日の丸菊　色本紅黄中輪く開花九月上旬く

○金紋同　葩内赤く外黄く開花九月上旬く

○皆川同　色白黄中輪あり開花九月上旬く

○並白同　大輪く太白吉野初霜水晶中輪あり小輪あり開花九月上旬く

○猩々中菊　色赤黒く形ち日の丸菊小同ジ開花九月上旬く

○奴大菊　葩外淡赤く内濃赤く開花九月上旬なり

○小町中菊　色淡紅よ濃紅の隈あるく開花九月上旬く

○両面同　葩外赤く内白く開花九月上旬く

○更紗同　又小菊なり黄の圍の葩白く中の葩群簇て赤く開花九月上旬く

○束津大菊　葩内赤く外紅紫金く開花九月上旬く

○小金餅中菊　色黄く開花九月上旬く花形ち心葩高く次第り絲ふくりく低く形ち餅ふ似くり

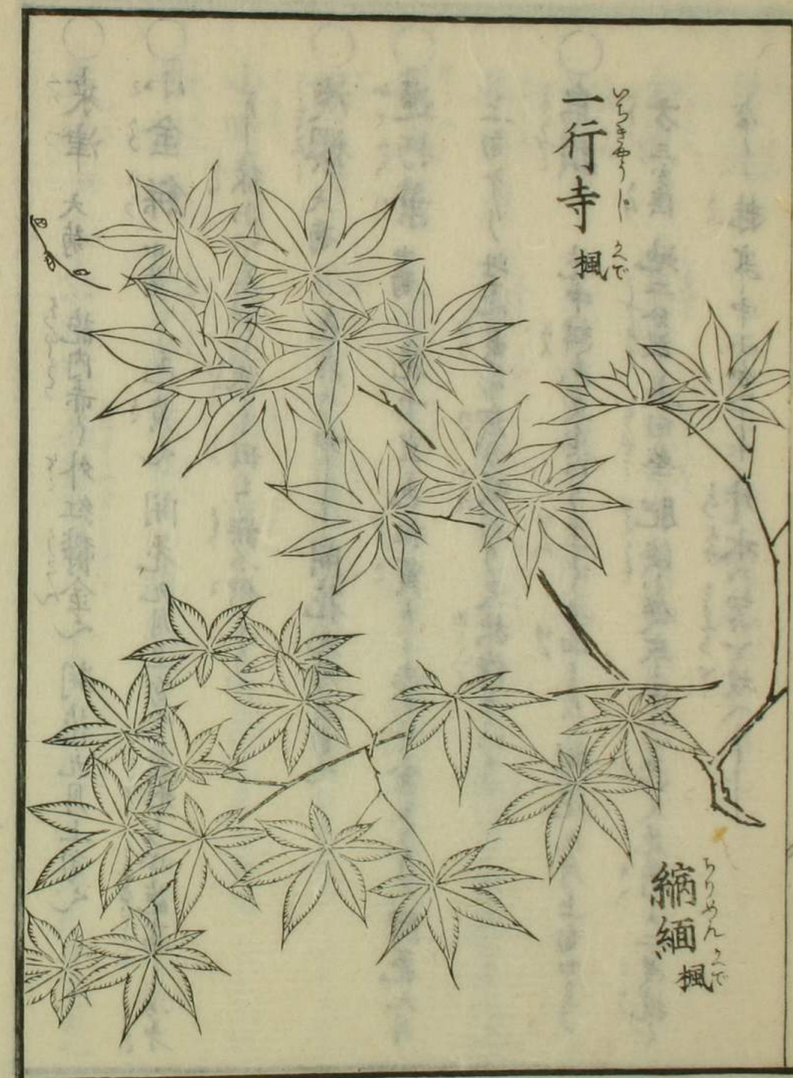
○淡櫻大菊　色名り如く開花九月上旬く

○遅朽葉中菊　花千重色極黄り赤きを含くり開花九月上旬なり此花夏より咲けり又秋作りけり

○烏頭　花中紺色又白けり至く上品く開花九月上旬なり

方三分陰　地二分湿　土回埜　肥淡小便寒中三度又花前ヨ二度撓ぐく抹寒中小分〳〵升水に切りて焼べく

寒櫻
濱菊


一行寺楓
綿綿楓

○物狂椿　花一重色ハ一輪紅一輪紅白點班一輪紅白筋班一輪紅白絞班
此り如く毎一輪小交雜あり　開花九月中旬甚美麗ふ〳〵もりなり
上品にて同種小正月咲くものあり是中品へ

○わびすけ椿　花一重　色純白へ　開花九月中旬なり　形花葉至て
迚に藥と鏑穿たる如く甚奇趣へ是心鏑椿の最上なりされど勇花者
是に心ぐりなくて益茶室小賞翫一用あ○ひもけれ名り雄心
ゆゑ按へ寂寥數寄へ佳花なるこの事を訛てつくるなるべし
或曰わびすけハ豊太閤の下され〳〵御銘なれ迚其樹いまハ存せりとぞ

○山茶花　花一重色淡赤　開花九月中り正月中旬迄なり

○蘿蔔花　即大根花　色白赤紫と少含るもなり　開花九月
中旬なり此花ハ散落種へ自然咲へ　保花の葉を菜花小同〳〵

○女郎花　花黄色にて同種へ　開花九月中旬又一種白花なる
あり　花九月中旬なり少〳〵後るゝへ　青方いけるも同〳〵勇時ハ
早朝より　升水を根へ焼ぐ〳〵

○峯の雪椿　花一重色清白　開花九月中旬へ形初嵐へ大輪ある
もの〳〵勇花者畧〳〵峯白〳〵なり是も近世へ出る新物へ

○紅葉楓　數種なり時節九月中旬へ○青海○定家○山
○緒絙○毛氈○綠青海○野村秋も紫色へ○一行寺秋も

○拔群艷ゝ故小専ら用ゆゝ右種類いづれも秋ち艷ゝめるまで
土地ふとりて濃淡ゝ乙山林ゝ艷ゝ就中摂州箕面山
なるを殊更艷強〳〵且一行寺の土地ゝ拘ゝ〳〵て十分ゝ艷ゝ
さねぶ〳〵葉大〳〵て賞美〳〵又櫨もよく艷ゝあり

○濱菊　花一重色白く蘂黄〳〵て高麗菊ゝ似ゝり　開花九月
中旬ゝ方日向地一分湿土ゝ〳〵ゝ肥淡小便花前小一両度虔ぐ
ゞ〳〵　移櫻ゝもに春彼岸ゝ〳〵莖長く葉ゝ上小花ゝ宅す抽る
ゝもの下品ゝ莖短く二三寸ゝる上品ゝ此種少〳〵予が園中に二三株育り

○八つ手　花白色　開花九月下旬　方地土肥摂ゝ〳〵　分株櫻葉小

春秋両彼岸ゝ花ゝ挿花ゝ賞美ゝ〳〵葉小夏月蔭ゝ〳〵て用ゆゝ
升水ゝ葉ゝ絞り巻上ゝて水ゝ入ゝ程鋸目ゝ入ゝ水器小打ゆゝ〳〵

○鳳蘭　花白地小赤縦筋班入ゝ　開花九月下旬ゝ香気賞ゝ
ゞ〳〵　育方蘭類皆同〳〵

○万年青　九月實淡赤〳〵漸ゝ色増く春小至迄実保ゝ
さもゝ霜雪又小鳥ゝ防ぐゝ為に渋紙の袋ゝ被せゆゝ〳〵
育方五月の部小既小ゝ〳〵花實ゝ葉小付ゝも用ゆゝ〳〵

○寒櫻　花彼岸櫻の花ゝ〳〵も也ゝ〳〵　開花九月下旬ゝ
寒中まで花ゝ育方諸櫻ゝ同〳〵

○唐葦　朝鮮葦ハもつとも九月又正月ハ頃清花少き時挿花
ニて閑雅あり忠て蓼止枝四方ハ出さるを用ハ是葦と同種ハて
水邊ハ生ぜよて育方いとゝ水ゝゝ上ゝゝのあり

蓼花翁傳前篇卷之四畢